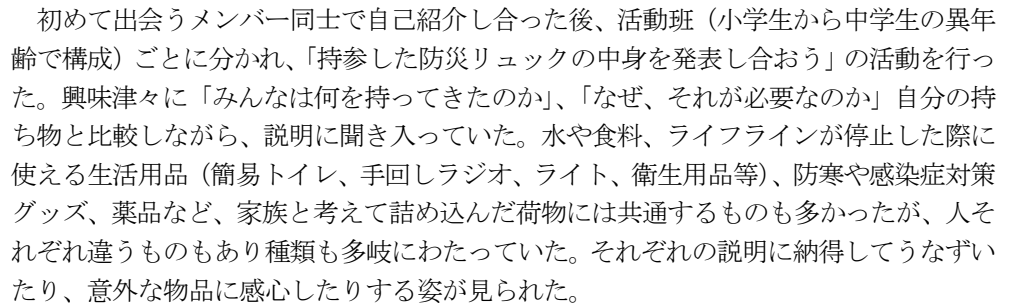


令和3年度国立淡路青少年交流の家教育事業
通学合宿「うずしお交遊塾」 実施報告

- 1趣 旨
- 今日、青少年の問題行動やいじめなどが大きな社会問題となっている。その原因の一つに子どもたちの生活体験不足、地域や家庭での教育力の低下などが指摘されている。これらの課題解決を目的として、子どもたちが家庭を離れ、異年齢の青少年が集って共同生活をするを通して、望ましい人間関係の育成や自主自立の精神を養う。
- また、南海トラフ巨大地震をはじめ、来たるべき大規模自然災害に備え、地域の安全・防災について、日常の備えや的確な判断のもと、主体的に行動することや災害時の助け合いの大切さについての理解を深める。
- 2主 催
- 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立淡路青少年交流の家
- 3共 催
- 南あわじ市教育委員会
- 4日 時
- 令和4年1月19日（水）～22日（土） 3泊4日
- 5場 所
- 国立淡路青少年交流の家
- 6対 象
- 南あわじ市立南淡中学校区小学3～6年生
南あわじ市立三原中学校区小学3～6年生
南あわじ市立南淡中学校 1～2年生
南あわじ市立三原中学校 1～2年生
- 7参加者
- 19名（小学生13名、中学生6名）
- 8スタッフ
- 国立淡路青少年交流の家職員、大学生ボランティア
- 9日 程

16:00 18:00 18:30											20:30 21:00	
1月19日（水）						受付・入所説明・自習	夕食	開塾式 ＜活動Ⅰ＞ うずしお交遊塾へようこそ！ ・持参した防災リュックの中身を発表し合おう。 ・避難所について話し合おう。	入浴	就寝準備・就寝		
	6:30	6:45	7:15	8:00	16:00 18:00 18:30					20:30 21:00		
1月20日（木）		起床	朝食	各学校へ登校	学 校	交流の家着・自習	夕食	＜活動Ⅱ＞ 避難所設営を体験してみよう！ ・班のみんなと協力して避難所を作ろう。 ・避難所で一晩過ごそう。	入浴	段ボールベッドで就寝		
	6:30	6:45	7:15	8:00	16:00 18:00 18:30					21:00		
1月21日（金）		起床	朝食	各学校へ登校	学 校	交流の家着・自習	夕食	＜活動Ⅲ＞ 3Dハザードマップ（立体）を作ろう！ ・自分たちのまちの地形を知ろう。 ・地域に潜む危険について考えよう。 ＜活動Ⅳ＞ 設営した避難所をよりよくしよう！ ・前日の避難所を改良して、もう一晩過ごそう。		段ボールベッドで就寝		
	6:30	7:00	9:00	13:00					15:30 15:40 16:00			
1月22日（土）		起床・片付け	朝食（配給食）・片付け	＜活動Ⅴ＞ 防災食を作ろう！ ・班のみんなと火おこしや食事作り（昼食）に挑戦しよう。			＜活動Ⅵ＞ うずしお交遊塾をふりかえろう！ ・災害時に必要な物や能力について考えよう。		アンケート記入	閉塾式	解散	

※大学生ボランティアと施設職員は、小・中学生就寝後に毎日「スタッフミーティング」を実施。



近年、中学生不在の交遊塾であったが、今回6名（初参加3名、継続3名）の参加があった。昨年度の参加者が、中学校に進学して継続参加を強く熱望した経緯もあり、今回、年齢対象を広げての実施となった。中学校と交流の家を自転車で行き、部活動が終わってから夕食時刻に間に合うように帰所するため、小学生より遅れて参加する生活リズムとなった。4日間、各活動班のリーダーとして小学生への心配りや声掛けなどの役割を担い、班員のよりよい生活に役立つ姿は頼もしく感じられた。また、中学生を頼って小学生が楽しそうに会話している様子が微笑ましく感じられた。

南あわじ市危機管理課の2名を招いて、「自然災害と避難」と題し、防災講座が行われた。避難所生活になった時の留意事項や、災害が起きる前に家族で決めておきたいことなどについて詳しくレクチャーを受けた後、トイレカーの見学を行った。南海トラフ地震で想定される被害状況を知り、普段から「何を準備するか」「どこに逃げるか」等備えておくことの重要性を感じ取っていた。また、トイレカーを初めて見た子供たちにとっては「ホテルのトイレのようにきれい」と高級感を実感し、「これがあれば安心してトイレができるのでありがたい」といった声が聞かれた。講座の後は、限られた時間の中で避難所設営に挑戦した。防災リュックで持参した物品、部屋にある机やイス、段ボール、寝袋、毛布など限られたもので工夫し一晩を過ごす。換気のためドアも開けっ放しにしたため、夜中から朝にかけて部屋の中は相当冷え込む。そんな状況下、段ボールを床に敷き詰めたり、箱を作ってベッドを作ったり、寝袋の中にエマージェンシーシートを入れたり子供たちの工夫が見られた。中には「風を通さないで暖かい」という理由で、詰襟制服のまま寝床に就く男児もいた。



(エピソード2日目) 避難訓練の成果

2日目の始まりは※吹上浜松林火災のため、職員指示のもと、他の利用者とともに講堂へ緊急待避しての学習活動からスタートした。交流の家玄関前には消防関係車両が7台ほど参集し、地元消防団の方も駆けつけ、消火活動に尽力していただいたおかげで、17時半頃には無事鎮火した。施設建物に火が回ることを想定して、つどいの広場にも放水用ホースが接続され準備されていた。消防団と施設職員の迅速な行動により、予定していた活動は支障なく継続することができた。予想外の事態であったが、施設職員にとっては、利用者への誘導指示や速やかな情報共有など、組織での連携した対応が適切に行われ、日頃の自衛消防訓練の成果を発揮する機会となった。

※ 部外団体が行った焚火から、施設敷地の一部である海岸沿いの松林に火が燃え移ったため、消火活動が行われる非常事態となった。

③ 3日目 活動Ⅲ： 「3Dハザードマップ（立体）を作ろう！」

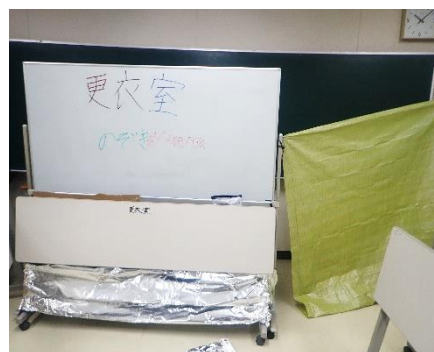
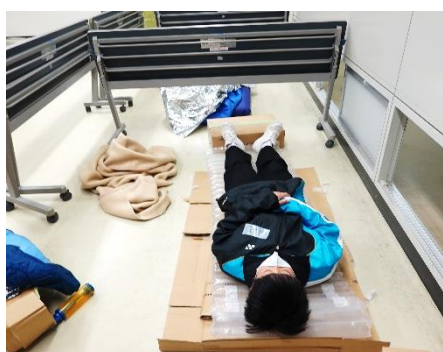
「3Dハザードマップ（立体）を作ろう！」では昨年に引き続き、兵庫県立淡路景観園芸学校 景観園芸専門員 光成 麻美 氏を講師に迎え、地元中学校周辺の立体地図を作製した。段ボールに等高線の入った地図を仮止めし、10m毎に段ボールをはさみやアートナイフ等で切り取り、積み重ねて糊づけする作業を4班に分かれて行った。最後に5枚の地図を合体して大きな1枚の地図が完成させるが、この製作活動に対する子供たちの意欲や集中力が素晴らしく、2時間黙々と作業を進めることができていた。担当する地図を2枚仕上げた班もあったが、最後まで集中力を切らさず、けがすることなく安全に作業を続け、中には作業が終了した後に片付けを自主的に始めるなど考えて行動する姿も見られ、参加者全体への良い刺激となった。

この立体地図は、危険箇所や避難する場所について高低差を確認しながら普段通っている道路や地域の理解を深めることができ、危険箇所を推測することで平時からの安全・防災について考える契機となった。



④ 3日目 活動Ⅳ： 「設営した避難所をよりよくしよう！」

「活動Ⅳ：設営した避難所をよりよくしよう！」は、昨夜寝て感じたことから「今日はこうしたい」を掲げ所に、より快適で安眠できる環境となるよう工夫改善を図る時間となった。「思ったよりも寒かった」「段ボールベッドが壊れてしまった」「床で寝るのは背中が痛かった」「今日は、シートを床に敷かず体巻に巻き付けて寝たい」など学校から帰ってすぐに振り返りを記録しておいた。短時間にたくさんの気づきを書いており、「体験してみる」ことの大切さを再認識した。昨夜、お互いの避難所を見せ合って気づきを共有していたりしたこともあって、どう改善するかイメージは全員が持っていた。「背中が痛く寝心地がよくない」「エアマットを使えたらいいな」という意見もあり、施設で準備していたエアマット使用を可能にすると全員が活用していた。「昨日と全然違って寝心地がいい」「こんなマットがあるのを初めて知った」「海水浴の浮き袋を防災リュックに入れたらいいのかな」などの声を聞きつつ寝床に就いた。体調がすぐれない場合は無理せず桜楼へ避難できることを伝えていたが、エアマット効果を体感しながら、全員が無事に自分たちの避難所で二夜を過ごすことができた。



(エピソード3日目) 今あるものをフル活用して

3Dハザードマップの時間を延長したため、避難所の改良にける時間が少なくなりました。限られた時間の中で、昨夜の反省を生かしつつ、より快適で安心できるようにそれぞれ工夫がなされた。段ボールベッドが押しつぶされてしまった男児は、3Dハザードマップで出た段ボール紙の切れ端を集めたごみ袋を箱に詰めて改良した。また、エマージェンシーシートを床に敷いて効果を感じられなかった女児は、体に直接巻き付けるようにして寝袋に入って寝るようにしていた。詰襟の制服で寝た男子生徒は「首が痛く、寝にくかった」という理由で、インナーウェアを充実させてジャージに切り替えていた。自分で考えて行動したリアルな体験は、必ず将来生きて働く知恵となるはずである。どんな些細なことでも「自分でやってみて納得する」ことの大切さを再認識した場面であった。

⑤ 4日目 活動Ⅴ： 「防災食を作ろう！」

「活動Ⅳ：防災食を作ろう！」では、ポリ袋に入れた食材を湯煎調理するバッククッキングで、昼食を二品（炊き込みご飯とおかず）作ることを課題とした。使える食材は、米、ニンジン、玉ねぎ、ジャガイモ、缶詰（サバ、ツナ、コーン）、調味料（砂糖、塩、みりん、醤油、カレー粉、味噌）と普段各家庭にありそうなものを設定し、使える水も1班8Lと限定した。また、簡易かまどの薪にはメタルマッチで火おこしすることをミッションとして課した。米の調理、おかずの調理、かまどの火おこしで役割分担し、どんなメニューにするかは班ごとに相談し、自分たちで決めながら進めた。新型コロナウイルス感染状況により、家庭科調理実習の体験不足が懸念される中、家庭での経験を生かし慣れた手つきで包丁を使ったり、洗い物をしたりする子たちが不慣れな子に教えながら取り組む姿が見られた。わからないことは確認し合ったり教え合ったり、どんな料理ができたか自慢げに見せ合ったりと、班の枠を越えて参加者全員で調理を楽しんでいた。節水のため、食器や食材を溜めた水でまとめて水洗いしたり、鍋の残り湯で洗い物したり工夫する姿もあった。

どの班も話し合いをしながら取り組み、予定時間通りに各班それぞれにオリジナル料理が完成し、穏やかな小春日の屋外で防災食を堪能した。「途中から分量を適当にしたが、結構おいしく味付けできた。」「自分たちで作ったし、屋外で出来立てを食べるからおいしく感じる。」と満足そうな笑顔を見せながら食事する姿が印象的だった。



(エピソード4日目) 念願のかまど係

メタルマッチで薪に火をおこすことは大人でも結構難しく、限られた時間の中で着火させるには熟達した技術を要する。当時4年生で交遊塾に参加した際、かまどの火おこし系の希望者が多く、誰が担当するか本人が納得しないまま一部の意見で決定してしまい、火おこし系の希望がかなわなかった男児がいた。今年この男児が、3年越しの思いを結実した形で、班の中で唯一かまど係となった。誰の手も借りずに、どの班よりもいち早く火をおこし、限られた燃料で火力と鍋の湯の管理をしている姿はとても頼もしく、また感慨深かった。

「中学生になっても参加したい」という意思をもっており、今後の活躍にも期待したいと願う。

⑥ 4日目 活動Ⅵ： うずしお交遊塾をふりかえろう！

「活動Ⅵ：うずしお交遊塾をふりかえろう！」では、3泊4日の生活や活動を踏まえて、防災リュックの中身について今一度、「本当に必要なものは何か」「何が有効活用できそうか」「さらに今後何が必要になるのか」について整理する時間とした。これまでの体験と生活をリアルに結び付けながら一人一人がじっくりと考え、新たな気づきについて発表した。「家に帰って家族でもう一度話し合って準備したい。」改めて事前の備えの大切さに気付くとともに、今回の体験を日頃の生活に生かしていこうという意欲と本気度が伺えた。

1.1 参加者の声（事後アンケートより抜粋）

＜小学生の感想＞

- （毎年）来るたびに内容が変わっていて、とてもおもしろいと思った。
- 今まで体験したことのないベッド作りや3Dハザードマップ作り、すごくなった。
- 防災リュックに入れたらいい物とか、みんなの意見が聞けて、自分の考えになかった物を参考に作り直したいと思った。
- 色々こんなに楽しめると思っていなかった。家族がいなくて心配だったけど無事暮らせてよかった。来年も来なくなった。
- ずっと自分は何も考えてなかったんだと気づいた。もっと日ごろから考えておいたらよかった。

＜中学生の感想＞

- 知らない子ともすぐに仲良くなれてよかった。
- 防災バッグの中がまだ完璧でないのも、もっと考えないといけないと思った。
- もし、本当に地震が来てその時に一人だったら、4日間で学んだことをちゃんと活かせるかなと思った。
- より自分を大切にしようと思った。

1.2 成果と課題

◆アンケート調査票から

事業全体及び活動内容の評価は、「満足」と回答した小中学生が84.2%、事業の進め方及び職員の対応についても89.5%と高い評価を得ている。「不満」「やや不満」と評価した項目が皆無だったことから、参加者の満足度の高さが伺える。

一方、事業の進め方の自由記述欄に「段ボールマット作りの時間をもっと長くしてほしい」とあった。防災講座のテーマを「避難所で留意すること」のみに絞って時間短縮し、そのノウハウを実際の避難所設営に生かしながら、設営にかける時間を長く確保できるように改善していきたい。

◆交流の「家」での異年齢集団生活を通して

参加者19名のうち、過去のうずしお交遊塾生が10名いた。そのうち3名が中学生となり、見通しをもって様々な場面で活躍する存在感は頼もしい。約半数が初参加であったが、厳しい寒さの中、不安やストレスを感じることなく安心して共同生活や日々の活動に取り組み、その絆を深めていくことができたのも中学生経験者の貢献度が大きいと感じる。

3Dハザードマップ作り、避難所設営、防災食作りと日を追うごとに、参加者一人一人が自分らしさを生かして自然と役割分担して協力し合いながら、「みんなで力を合わせる心地よさ」や、「責任を果たして感謝される喜び」、「自分たちの力で最後までやり遂げた達成感」を味わっている表情を随所に垣間見ることができた。

◆「防災・減災」意識を高める体験活動を通して

今回、家庭で事前に防災リュックを作って持参することから事業はスタートしている。自分がこだわりをもって持参した物や、迷いながらも家族と相談して持ってきた物を紹介する姿は誇らしげに見えた。この事業をきっかけに防災リュックを初めて作った子もいる。3泊4日全ての活動を通して、その物品が持つ重要性や必要感によりリアルに感じ取ることができたのではないかと考える。冬だからこそ絶対に欠かせない物、季節関係なくいつでも必要な物といった考え方も深まったように思う。家に帰って家族で話し合い、再度中身を見直し、必要不可欠な物をリュックに備えてもらえることを願いたい。

また毎年、兵庫県立淡路三原高等学校から高校生がリーダーとして参加してくれているが、今年度は新型コロナウイルス感染状況や受験等の理由により参加は困難となった。参加をキャンセルした小学生も3名いて、子どもたちにも感染が広がるオミクロン株の現状を鑑みるとその判断は致し方ない。そんな状況でも震災は突然やってくるため、「防災教育」を看板に掲げる国立施設として果たすべき使命もある。有事の際に起こりうる場面を想定しリアルを追求できる教育事業を継続・発展させるとともに、防災拠点の教育施設として地域や学校に認知されるよう努力をしていきたい。



主 催 国立淡路青少年交流の家

〒656-0543 兵庫県南あわじ市阿万塩屋町 757-39

TEL 0799-55-2696 FAX 0799-55-0463

<https://awaji.niye.go.jp>